

2016年  
11月29日  
火曜日

今年度は、経済学部科目として「言語と文化」というオムニバス形式の科目を担当した。授業のテーマの環境として、「日本語は難しいか」という問題提起を試みた。ある言語の難易度を知るために、言語類型論的な観点から、それぞれの言語の相対的な近さや類似度からの比較をするという考え方があろう。ごく大まかに言って、ある言語どうしの間での違いが大きいほど難しく、似ているほど易しいととらえることができるだろう。日本語はいわゆるSOV構造（S：太郎が／O：りんごを／V：食べる）をとり、世界の諸言語の中でこの構造自体は特に珍しいものではない。日本語を他の言語と比較すると際立つのは、文字体系として3種の文字（ひらがな、カタカナ、漢字）を使用することである。とりわけ非漢字圏の学習者にとって、書く

長谷川 哲子 准教授（日本語教育学）

# 「日本語は難しい」から「やさしい日本語」へ

ことのハードルが高くなることは想像に難くない。

このように、他の言語と比較した場合、日本語の難易のありようは様ではなく、「日本語は難しい」と一言のもとに片付けるべきではないが、一方で近年「やさしい日本語」という提唱がなされている。その背景には、日本語学習者の多様化として語られる現状がある。日本語を学ぶ人といえ、真っ先に留学生が思い浮かぶかもしれないが、それ以外にも生活者としての日本語学習者の存在も大きい。また、日本語指導の必要な児童生徒数も増加傾向にある。こうした児童生徒の母語は、ポルトガル語、中国語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語（文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語別在籍状況」『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に

関する調査（平成26年度）」における母語別在籍者数の上位5言語）等、多岐にわたる。このような現状への対応の一つとして、地方自治体の公式Webサイトの多言語対応がある。たとえば、大阪市の公式サイトには、英語、中国語、朝鮮語に加え、Google翻訳を利用してアイスランド語からロシア語まで（五十音順に）80以上の言語に対応するページが見られる。また、西宮市の公式サイトでは「多言語生活ガイド」として、日本語、朝鮮語、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、やさしい日本語の各版が紹介されている。ここでいう「やさしい日本語」とは、平易なことばを使用したわかりやすい日本語のことである。昨年11月の福島沖地震の際、NHKの津波警報の画面上に赤地に白抜きの大きな文字で「すぐにげて！」と表示された

ことがその好例である。多様な母語への対応として個別の言語への翻訳という多言語対応ももちろん大きな効用を発揮するが、多言語ゆえに対応可能な言語数には限界も予想される。日本語母語話者以外にもわかりやすいコミュニケーションをめざす「やさしい日本語」、いわばユニバーサルな日本語コミュニケーションの担い手となる意識を日本語母語話者側も備えていく時期が来ていると考えている。